

日刊 労働券千葉

81.6.2
No. 754

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八(動力車会館)
(電話)二九三五(六ヶ敷) 品三二七二〇七

35万人体制粉碎へその3

前回(その2)において、国鉄35万人体制粉碎の闘いは、本質的にひとりひとりの国鉄労働者が「自らが銃をもって戦場に立つのか」ということを突きつけられた闘いであることを明らかにしました。今回は、労働組合の闘う方向性について明らかにしてゆきたいと思えます。

マル生へのイデオロギー的屈服

日本労働運動の現状は、総体として、支配体制の危機に起因する反動攻撃の強まりに対し、真向から闘うことをせず、むしろ、資本の側、右の側へ身をすり寄せることにより、生き延びようとしているといえます。

これは、基本的には、「パイを大きくして分け前も大きく」という資本主義権立を前提としたマル生思想、差別支配の思想へのイデオロギー的屈服を示しています。

高度経済成長政策下において「クソのついた銭でも銭は銭」、「組合員の意識は多様化している」という言い方で、戦略、戦術を便宜的にネジ曲げ、階級的、本質的立場からの「苦しくてもこの一点はがんばり切る」という姿勢を、自ら放棄してきたことの積み重ねが、今日の引春闘の敗北を招来した全ての原因だと言っても過言ではありません。支配の唯一の手段が、労働者・人民の分断・抑圧であり、差別であることは古今東西変りない原則であり、マルクスが「共産党宣言」の中で「ときどき労働者が勝つことがあるが、ほんの一時にすぎない。彼らの闘争の本来の成果は、その直接の成功ではなく、労働者の団結がますます拡大されてゆくことである」と述べている原則を放棄したところから労働者階級の勝利を切り拓くことなどはできないということ、今日の状況は何よりも鮮明に示しています。

——合理化に追い詰められた「共闘」——
引春闘の中で国労、動労、全動労、全施労の「四者共闘」が行われ、鉄労も含めた「五組合共闘」が追求され、鉄労の側から「ストラ

イキをやる組合との共闘はできない」と拒否された事態の中に、今日の国鉄労働運動(日本労働運動)の病根がはっきりと示されています。思想的確信を持たないが故に、個々の合理化に屈服し、組織人員の減に追い詰められ、かと言って原則的に闘う勇気と確信のないまま、ボス交によってカンゴ状に寄せ集まることを画策したことに対し、鉄労という右翼組合の方が、思想的、イデオロギー的立場から拒否反応を示しているのです。

全通と全動政の組織統合問題も、基本的にこれと同じであり、J.C.、同盟に賃上げ闘争の主導権を奪われ、引春闘を「ストなし」にまで追い込まれた総評労働運動の現状も同じ構図の中にあります。

セクト的立場優先の「本部」反動分子と動労千葉の正義性

鉄労との「共闘」などは「産報化」以外のなにものでもなく論外であるという職場・生産点の声を無視し、「35万人体制」や「産報化」を前提として容認し、その中で、いかに生き残るかというセクト的立場を最優先させ、職場要求を当局に売り渡す「本部」反動分子の、合理化の先兵、当局の武装親衛隊としての本質を、闘いを通して暴露し、闘いぬいてきた三里塚・ジェット闘争をはじめとする動労千葉の闘いの正義性は、いまますます鮮明と員になっており、全国のあらゆる産別・単産の中で、「三里塚を闘う労働運動」の潮流は、大きく前進しています。

われわれは、60年安保という大政治闘争の中から、はじめて、公労法の枠を突破するストライキへの決起が始ったことを今こそ想起しなければなりません。

軍事大団化・改憲攻撃のかつてない強まりの中で階級対立はギリギリまできており、国鉄35万人体制攻撃は最も先鋭な対立点です。ボス交を排した職場・生産点からの闘い、職場抵抗闘争を広範に創り出し、35万人体制を粉碎してゆくにはありませんか。

全組合を粉砕攻撃破壊組織を